

「帰国体験を活かす」ことに対する 考え方とその要因 —帰国大学生のインタビュー結果の分析から—

岡村 郁子

1. 研究背景と問題の所在

文部科学省による「帰国・外国人児童生徒教育等に関する施策」において、帰国生教育については「海外における学習・生活体験を尊重した教育を推進するために、帰国児童生徒の特性の伸長・活用を図るとともに、その他の児童生徒との相互啓発を通じた国際理解教育を促進するような取り組みが必要」との認識が示されている。しかしながら実際の帰国生受け入れ現場においては、帰国生が海外生活や帰国経験を通してどのような「特性」を身につけたのかは必ずしも明らかに意識されていない。

帰国生の特性について取り上げた先行研究において、佐藤(1995)は、ステレオタイプの帰国生の特性を強調し過ぎることのマイナス面に言及し、帰国生を一定の枠に位置づけることなく実際の帰国生の多様な生活背景をよく見直す必要があると述べている。また渋谷(2000)は、中学校の帰国生クラスでのフィールドワークを通して、帰国生が従来のステレオタイプの周囲の見方と実際の自分とのギャップに悩む姿を浮き彫りにし、佐藤と同様、帰国生の実際の声は周囲の見方とずれがあると結論付けている。

そもそも一般的に認識されている「帰国生の特性」とはいかなるものだろうか。中西(1980)、星野(1983)、松原(1983、1986)、原(1982、1983、1986)などによれば、帰国生の長所として「国際感覚がある、異文化体験によるバランスの取れた自文化観と異文化観(文化の相対化)をもつ、積極性・行動力・旺盛な好奇心が顕著」などの諸点を、短所として「集団訓練の欠如、自己主張が強すぎる、競争意識の欠如」などが挙げられている。これらはいずれも外から見た「帰国生の特性」であるが、帰国生自身の認識について問うためには、ある程度自己を客観的に評価できるようになった段階で調査する必要がある。そこで

本研究では、帰国した大学生を対象に、帰国体験によって得られた「帰国生の特性」をどのように認識しているのかを調査することにした。

一方、帰国生自身はその特性を「活かす」ことについてどのような考えを持っているのだろうか。帰国中学生のクラス意識についての調査を行った岡村(2008)によれば、中学生では、一般クラス・帰国クラス・段階的混入クラスのいずれの形態においても帰国体験を活かすことにはあまりこだわっておらず、クラスの友人と仲良く過ごすことができれば学校生活での満足度は高いことが明らかになった。ただし、これについても大学生段階での検証が必要である。

以上をふまえて本研究では以下の3つの課題を定め、研究を進めることとする。

1. 帰国大学生が、帰国体験によって身につけたと考えられる「特性」とはどのようなものか。
2. 帰国大学生は、帰国生の特性を「活かす」ことについてどのような考えを持っているか。
3. 「帰国体験の活用」に対する考え方を決定づけると想定される要因は何か。

2. 研究方法

帰国大学生を対象とした1時間～1時間半程度の半構造化面接を行い、録音データを文字化したものを分析の対象とした。インタビュー時期は2009年5～10月、インタビュー対象者は学齢期に2年以上の海外生活経験を持つ帰国大学生8名(男性3名、女性4名)である。録音データをすべて文字化した後、「帰国生の特性」と「特性の活用についての考え方」に関する部分を抜き出し、質的に分析を行った。

対象者の属性は<表1>に示すとおりである。

表 1 調査協力者の属性

	性別・年齢	在外時の滞在地・年数	在外年数 (在学年数)	帰国後の 受け入れ形態
A	女・ 22歳	ボストン：2～3歳 デュッセルドルフ：8～10歳（日本人学校）	4年 (2年)	帰国枠中・高 ～大学内進
B	女・ 20歳	ヒューストン：8～9歳（現地校） ニューヨーク：10～12歳（現地校）	5年	一般枠中・高 一般枠大学
C	男・ 22歳	ヒューストン：10～11歳（現地校） ニューヨーク：11～14歳（現地校）	5年	一般枠高校 一般枠大学
D	女・ 20歳	フィンランド：0～1歳、ニューヨーク：11～13歳 （現地校）、シリア：13～15歳（インター）	6年・4ヶ月 (5年)	帰国枠高校 帰国枠大学
E	男・ 19歳	ダラス：6～10歳、13～14歳（現地校）	6年 5ヶ月	帰国枠高校 一般枠大学
F	女・ 20歳	ニューヨーク：2～6歳（日本人幼稚園～現地校）、 11～15歳（現地校）	8年 (5年)	帰国枠高校 一般枠大学
G	女・ 18歳	中国：10～18歳（現地校）	8年2ヶ月	帰国枠大学
H	男・ 20歳	ボストン：2～3歳、ネパール：7～12歳 （インター）、シカゴ：13歳（現地校）	9年 (7年)	帰国枠高校 ～大学内進

調査協力者のうち、在外年数の合計が2年以上～6年未満を「短期型」、6年以上～8年未満を「中期型」、8年以上を「長期型」と分類した。在外年数別の特色として、短期型では一般枠受験で進学（帰国枠中学からエスカレーターで大学1名）、中・長期型は帰国枠受験が多数を占めることがわかる。滞在地（複数ある場合は滞在期間の長い方）は、主に英語圏からの帰国が5名、非英語圏からの帰国が3名であった。

3. 研究結果

3.1. 帰国大学生が考える「帰国生の特性」

インタビュー項目で、「在外・帰国体験によってどのような力や特性が身に着いたと思いますか?」という質問を行ったところ、以下のような回答が得られた。（（ ）内は回答者記号）。

海外の出来事に自然に目が行く (B)、いろいろなものの見方ができる (D)、数少ない日本の友達と折り合っていくために協調性が身に着いた (B)、滞在国についてのマスコミの情報の偏りがわかる (D)、英語ができることで受験や将来に有利 (C)、多様性に対して寛容になれる、様々な国の人と偏見を持たずに接することができる (D,H)、積極的にさまざまなことに取り組めるようになった (A,E,F)、人前で話す力や度胸が身に着いた (E)、協調性を失った (F)、自分のことを理解してもらうための努力ができる (A)、現地での反日感情などがよく理解できる (G)、欧米風のマナーを身

につけた (H)、日本のよいところをきちんと理解することができる (B,E)

これらの結果を KJ 法により分析したものが下の<表 2>である。学力や社会性（それぞれプラス面・マイナス面）、公正さ、コミュニケーション能力、視野の広さ、積極性、日本文化への思い入れ、という7つのカテゴリーが抽出された。

表 2 帰国生の考える帰国生の特性

概念	カテゴリー	概念	カテゴリー
帰国後の学習の遅れ	学力(+)	積極性	社会性(+)
学力の高さ	学力(+)	柔軟性	
公正な判断力	公正さ	自己開拓力	視野の広さ
人種偏見のなさ		豊かな人間性	
英語力	コミュニケーション能力	海外の出来事への関心	積極性
ブレイン能力の獲得		他角的なものの見方	
協調性の欠如	社会性(-)	多様性への理解力	積極性
不適応の強い段			
日本の帰国の欠如		反日感情の理解	日本文化への思い入れ
		日本語・日本文化の集積	

3.2. 帰国生の特性を「活かす」ことに対する考え方

次に、帰国体験やそこから得られた帰国生の特性を「活かす」ことについての考え方について尋ねた。「一般に「帰国体験を活かす」ということがよく言われますが、それについてどう考えますか?」という質問項目に対して得られた回答により、対象者8名を<図1>に示す6つのタイプに分類した。

以下、各タイプについて、その発言の抜粋とともに、それぞれの特色を述べる。

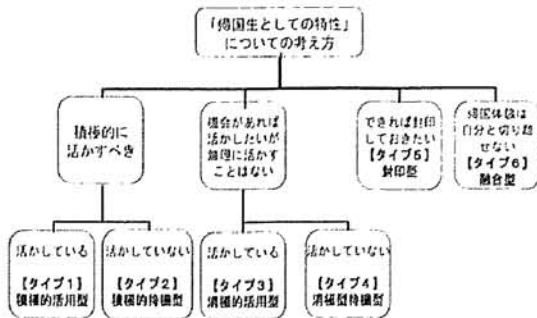


図1 「帰国体験を活かす」ことへの考え方の類型

【タイプ1】積極的の活用型=対象者F

帰国体験を積極的に活かしたいという気持ちが高く、現在の大学生生活はもちろん、将来にわたって、できる限り帰国体験を活かしたいという意識を持っているタイプ。

【タイプ2】積極的待機型=対象者A

「(潜在地が)英語圏ではなかったの、直接英語を活かしてどうこうということはないと思うのですが、せつかく海外に何年もいたから、それを自分の中で活かしてみたいという意識的な部分もあるかなと思います。」

→帰国体験を活かしてみたいという意識的はありつつも、実際に活かす場面がなく、将来何らかの形で活かす機会が来るのを待ちたいとするタイプ。

【タイプ3】消極的の活用型=対象者C

「別に活かそうという気持ちは(ありません)。学校生活においてそれを使って何か積極的にやろうということはないです。(略) 普段英語の論文も読みますし、PPTを作ったりすることもあるし、そのような意味で大学に入ってからの方が帰国として得られた英語能力のようなものを使う機会は高校に比べて全然多いです。」

→取り立てて帰国体験を活かそうと意識してはいないが、普段の授業などで自然に活かす結果となっているタイプ。

【タイプ4】消極的待機型=対象者D

「自分の選んだ道で、いつか活かすところがあればいいな、ぐらいの気持ちなので・・・(略) 活かさないともったいないなと思うこともあるのですが、でもそこまで積極的にやらなくていい

いのではないかなとは思いますが。」

→積極的ではないものの、もし将来的に活かすことがあれば活かしてもよいというタイプ。

【タイプ5】封印型=対象者B

「(帰国体験は)できれば封印しておきたいです。逆にまた期待されても困るといいますか、いやなので。」

→渡米直後の英語の苦手意識と、帰国して編入した中学校で特別視された体験から、帰国体験を決して表に出したくないとして封印している。

【タイプ6】融合型=対象者E,G,H

「(英語ができることを)ずっとちやほやされてきたわけですが、そこで勝負したくない。英語はできるのが当たり前でそこで勝負してもダサい感じがするので、思考力や実行力などきちんと評価してもらいたい。(略) 英語は・・・強みであることは否めないのですけれども、特にそれを前面に出した仕事をするなど考えていないです。」【H】

「自分の中に「帰国」というものが埋め込まれているので。(略) 帰国ということは自分の一部で、だからそれを活かすといったら私を活かすのだから。私の顔つきにも体格にも、すべてに帰国ということが影響していると思うんです。(略) そういう意味で帰国を活かしていくと思う。自分と切り離せないものとして。まして隠すことなんてありえません。」【G】

「(外資系の企業に入りたいという理由には)英語ができることも含まれますね。前提になっているということです。(帰国生であるということ)を殺してもいいかな。殺しても生きていくことはできる。普通に技術者としてN社など、そのようなところでずっとやっていっても、それはそれで楽しいと思います。(活かすも殺すも) どちらでもありという感じです。」【E】

→自分の中に「帰国体験」が埋め込まれ、融合している。3名とも海外との学生交換をアレンジする大学内外のサークル活動において中心メンバーとして活躍。過去・現在ともに成功体験としての回想が多く、帰国生である自分も活かしながら、帰国でない部分で勝負することになってもまったく問題ないという余裕があるタイプ。

3.3. 帰国生体験の活用についての意識の差異に関わる要因

前項で明らかになった各類型を、帰国経験の活用という観点から、積極的・消極的にかかわらず帰国体験を活用している「活用グループ」と、活用していない「非活用グループ」に分け、その意識の差異に関わる要因について検討を行った。

「活用グループ」に属するのは C (短期型)、E (中期型)、F・G・H (長期型) の計 5 名であり、長期型の割合が高いことがわかる。また、彼らのインタビューの内容から英語力や全般的な学力が高いことが示され、大学の授業や課外活動において英語を使用する機会が多いとも述べている。

一方「非活用グループ」に属するのは A、B (短期型)、D (中期型) の 3 名で、短期型の割合が多い。彼らは非英語圏からの帰国、または英語力にあまり自信がなく、現地校でも ESL に長くなるなど、英語習得に苦勞した経験を語っている。こうしたことから、帰国経験の活用についての考え方の決定要因としては、在外年数ならびに英語力がキーとなっている可能性が示唆された。

4. 考察

帰国大学生が自らの海外体験から得られた特性として認識しているものは、従来周囲から認識されているものとあまり変わらないことがわかった。しかしながら、対象者からは「外国にいなかった場合の自分、という比較対象がないので答えにくい」、というコメントも多く、本来の気質や生活習慣として身に付いているものと、帰国生の特性といえるものとの区別は難しいかもしれない。他の生徒と比較して客観的なデータを得るためには、さらに在外経験のない大学生との比較を行うことが必要であろう。

また、帰国体験や特性を「活かす」ことに対する考え方としては、帰国大学生は中学生と異なり、帰国体験や特性について、8 名中 6 名が積極的・消極的にかかわらず活かしている、あるいは活かそうとしていることがわかった。これは、中学生と比較して大学生は授業やサークルなどで英語などを活かす場面が多いことや、在外年数が長くなることで「活用グループ」に多い「融合型」

の学生が増加することが要因であると考えられる。一方、特性を活かすことについての考え方の決定要因として、「在外年数」ならびに在外時に獲得された「英語力」が関わっている可能性が示唆された。これは欧米偏重主義の日本の学校風土を反映したものと考えられ、英語が苦手な帰国生が「封印型」に陥ることを助長する可能性があるといえよう。

5. 今後の課題

本研究の成果をふまえ、今後はインタビュー対象をさらに増やして、結果の精緻化を図るとともに、「滞在国」「渡航・帰国年齢」や「受け入れ形態」など他の属性による、帰国生の特性ならびにその活用に対する意識の差異を検討し、さらに在外時や帰国後の経験と「帰国体験の意味付け」をいかに関連付けるかが今後の課題である。また、受入れ側（学校）や家庭で認識されている「帰国生の特性」が帰国生自身の意識とどのように異なるのかを探ること、短期あるいは長期の留学（語学留学・交換留学・学位取得など）から帰国した大学生との意識の違いについても、研究を進めたいと考えている。

参考文献

- 岡村郁子 (2008) 「帰国生の受け入れクラスに対する意識－受け入れ形態の差異に着目して」 異文化間教育学会『異文化間教育』第 28 号 p.100-113
- 佐藤郁雄(1995) 「転換期にたつ帰国子女教育」 多賀出版
- 渋谷真樹(2000) 「マイノリティ集団内部の多様性と力関係－帰国子女教育学級に在籍する『帰国生』らしくない『帰国生』に注目して－」 お茶の水女子大学ジェンダー研究センター『ジェンダー研究』3 号 p.149-162
- 中西晃 (1980) 「帰国子女の特性」 東京学芸大学海外子女教育センター『帰国子女に関する調査研究』30
- 星野命 (1994) 「帰国子女の行動特性・言語意識」 明治書院『日本語学』13 号 p.54-60
- 松原達也 (1986) 「帰国子女の学力・人格特性・性格意識および教師の意識に関する研究」『国際化時代の教育』創友社、276-293